

# 台湾人学生との異文化交流 「高苑科技大学冬季日本語・日本文化研修」報告書

## Intercultural Exchanges with Taiwanese Students A Report on Kao Yuan University Japanese Language and Culture Program

(2016年3月31日受理)

佐生 武彦 竹野純一郎 佐々木公之 C.バロウズ 藤代 昇丈 福田 衣里  
Takehiko Saiki Junichiro Takeno Kimiyuki Sasaki Christian Burrows Noritake Fujishiro Eri Fukuda

Key words : 高苑科技大学, 日本語・日本文化研修

### はじめに

記念すべき第一回目の「高苑科技大学日本語・日本文化研修」が平成28年1月18日から22日まで、5日間の日程で本学にて実施された。参加した台湾人学生からは、「満足度200%」という声が出るほどの大成功を収めた。本研修は引き続き今後も実施することで台湾側との合意ができていく。今後の研修を更に充実したものにするために、今回の研修を構成する3つの活動、つまり、1) 日本文化に関する講義、2) 合同プロジェクト、3) 学内体験授業について、その概略と所感を述べ、台湾人学生からの感想にも触れながら、改善点を考えてみたい。また、学内研修に続いて実施されたホームステイについても検討する。加えて、本学学生にとっての本研修の意義を述べ、さらに本学と高苑科技大学との今後の交流について、現時点での展望を記しておきたい。

## I. 全体の旅程と参加者の概要

### 1) 本研修全体の概要<sup>1)</sup>

全体の旅程 (10日間)		
日 程	内 容	備 考
1月17日(日)	関空到着→岡山入り	
1月18日(月)～22日(金)	本学で研修	宿泊は岡山外語学院
1月22日(金)～24日(日)	ホームステイ	
1月25日(月)	USJ訪問、大阪泊	
1月26日(火)	関空発→高雄	

### 2) 研修参加者

参加者の所属学科、人数、性別、学年は以下の通りである。

参加者の内訳			
	所 属 学 科	人 数	学 年/備 考
1	日本語学科	16 男8・女8	2年9名、3年7名
2	他学科(観光事業管理科等)	5 女5	2年3名、3年2名
3	その他	1 (女子)	中学生(2年) 大学関係者の息女
4	応用外語系	1 (男性)	引率者(日本人)

### 3) 参加者の日本語能力

高苑科技大学から提出された資料には、日本語学科に所属する各参加者の日本語能力が日本語能力試験の等級で示されていた。等級と人数は以下の通りである。N2 (3名)、N3 (6名)、N4 (8名)。今回同行の中学生もこの中に含まれている。各等級が示す能力の内容については以下の表を参照されたい。

日本語能力試験の等級	
レベル	内 容
N2	日常的な場面で使われる日本語に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる。
N3	日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる。
N4	基本的な日本語を理解することができる。

## II. 午前と午後の活動について

上記3つの活動のうち、午前中に行われた1) 日本文化に関する講義と2) 合同プロジェクトには、日本語学科の16名に中学生を加えた17名が参加した。日本語学科に所属しない他学科の5名は、岡山外語学院から派遣された講師による日本語の授業を受講した。午後に実施さ

れた3) 学内体験授業には、22名全員が参加している。すべての体験授業に、引率の先生も参加された。

尚、20日(水)の午後は、学外研修として後楽園と岡山城を散策した。22日(金)は3限目を使って「合同プロジェクト」のプレゼンテーションを実施し、4限目には閉会式とさよなら茶話会を行った。

### Ⅲ. 日本文化に関する講義

本研修の主要項目の一つとして、国際教養学部にも所属する教授陣がそれぞれの専門分野または準専門分野に関する講義を担当した。評価の欄にある数字は、研修終了後に研修参加者が回答したアンケート調査の結果である。評価のスケールは、1から4で、4が最高点である。講義は、総じて、好評であったと思われる。「日本の伝統文化：陶芸」については、「実際に焼き物を体験できた良かった」という感想が多く、その点で期待に応えられなかったための数字だと思われる。受講生の日本語能力については、大学での講義をフォローできるものであったのか気になるころではある。特にN4の受講生には少し無理があったのではないかという印象を受ける。

日本文化に関する講義				
月 日	曜	限	タイトル	評価
1月19日	火	1	日本の伝統文化：陶芸	1.94
1月20日	水	1	県で綴る日本文化	2.94
1月21日	木	1	日本人のコミュニケーション	3.53
1月22日	金	1	日本語文法と国文法の比較：日本語誕生の秘話	2.76

### Ⅳ. 合同プロジェクト

初日の開会式とオリエンテーションに続く、最初の授業として、国際教養学部の教員による「プレゼンテーションの方法」を国際教養学部の学生と一緒に受講し、合同プロジェクトの下準備に入った。プレゼンテーションに関する講義の後、事前に編成しておいたグループに分かれて、調査研究のテーマを決めるなど、和気藹々とした雰囲気の中で、順調に作業が進んだ。日本と台湾のキャンパス・ライフの相違に関して、グループ毎に簡単な発表をさせる試みが功を奏し、合同プロジェクトは瞬間に勢いづいた。

今回の研修を「大成功」に導くことができた一つの理

由として、各授業が理想的な形でスケジュールに納まったことが上げられる。国際教養学部の学生との合同プロジェクトのための時間を、初日の18日から22日までの5回分すべてを2限目の時間に設定できたことは非常に有り難かった。これに加えて、4回の「日本文化に関する講義」をすべて1限目に配置できたことも成功に貢献している。

合同プロジェクト				
月 日	曜	限	タイトル	評価
1月18日	月	2	「プレゼンテーションの方法」	3.06
1月19日	火	2	合同プロジェクトⅠ	
1月20日	水	2	合同プロジェクトⅡ	
1月21日	木	2	合同プロジェクトⅢ	
1月22日	金	2	合同プロジェクトⅣ	
//	//	3	プロジェクト・プレゼンテーション	

今後の研修を成功に導くための施策として、研修期間中に限って、授業時間の移動をも視野に入れながら、最適なスケジュールを確保することが望まれる。これを実現するにあたっては、教員間の連携に加えて、教務部の協力も必要になるであろう。

合同プロジェクトでは、慣習や制度に関する日台の比較研究がテーマとして取り上げられ、各チーム内で活発な意見交換が行われた。日本人からの情報収集の一環として、学食などに集う他学科の学生にインタビューをするチームもあった。台湾人学生が日本語でインタビューをし、同じチームの日本人がそれをサポートするというコラボレーションが見られた。インターネットを使った情報収集も同時に行われていたが、学内のWi-Fi事情が「場所によっては電波が届かなず、少々苦労した」という声も寄せられた。今後に向けて改善されることを願うものである。

最終日となる22日の3限の時間を使って各プロジェクト・チームがプレゼンテーションを行った。プロジェクトに費やすことができた時間が約6時間という短い時間であったことを考慮すると、「良く頑張った」と思える仕上がりのプレゼンテーションが続いた。

合同プロジェクトのテーマ	
1	好きなキャラクター ―銀魂― 日台比較
2	日本人学生ファッション事情
3	日本人学生カラオケ事情
4	日本と台湾の新年と年越しの過ごし方
5	和菓子と洋菓子 日本と台湾の架け橋

台湾人学生の合同プロジェクトに対する評価は、3.35であった。総じて高い評価をくだしている。「日本人学生とじっくりと話をする機会が持て、自分の『下手な日本語』に根気よく付き合ってくれたことを嬉しく思う」という趣旨の感想が目立つ。「合同プロジェクトのための時間が少ない」という意見が数名から述べられた。また、「グループの人数が不均等だ」との意見もあった。時間については、5日の日程である限り、残念ながら改善の余地はない。人数について一言加えておくと、研修期間中に2人の日本人学生が連日欠席したこと。更に、学部在籍する中国人学生2人を日本サイドに加えなかったこと。この2つの要素が重なって、5つのグループの内、1つは7人、もう1つは4人という不均衡が生じた。今後はこの経験を生かして、問題を最小限に押さえるようにしたい。

## V. 学内体験授業

今回は大学の1学科（子ども学科）及び短大の2学科（総合生活学科と保育学科）から授業を提供して頂いた。授業の性格を厳密に述べると、普段の授業時間に本学の学生と同席する形での参加は、「保育方法演習B」と「フードクリエイティブ論実習B」の2つのみで、他の3つの授業に関しては、台湾人学生のためにわざわざ時間を割いて作って頂いたというのが実情である。「スライム作り」の授業では担当の先生とゼミ生数名がアシスタントとして参加して下さった。「ソフトバレー」には、空き時間であった国際教養学部の学生が十数名加わった。「特別講義：大阪・ヒョウ柄ファッションの文化」は、台湾人学生のみを対象とした授業であった。

それぞれ特徴のある授業で好評であったが、「ソフトバレーを楽しもう」と「フードクリエイティブ論実習B」は特に楽しめたようである。初日の4限目に実施した「ソフトバレー」では、日台の学生と一緒に汗をかくことで、より一層打ち解けることができたようであった。そのような心理的効果もこの授業に対する高い評価を生み出した一因であったと思われる。「体育」が持つアイスブレイカーとしての役割は、今後の研修でも生かしたいと考えている。総合生活学科の学生と一緒にいった調理実習は、台湾人研修生のあらゆるニーズを満たしたように思

われる。「日本語を話しながら、好きな日本食を日本人の学生と一緒に作る。」同席した教員によると、「どの学生も楽しそうに取り組んでいた」そうである。この調理実習については、研修にも慣れた4日目というタイミングも良かったのかも知れない。ここにはお名前を明記していませんが、今回の体験授業を引き受けてくださった先生方には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

学内体験授業				
月 日	曜	限	タイトル	評価
1月18日	月	3	「スライムを使った遊びを考えよう」	3.14
〃	〃	4	「ソフトバレー楽しもう」	3.38
1月19日	火	3	「保育方法演習B」	2.95
〃	〃	4	「特別講義：大阪・ヒョウ柄ファッションの文化」	3.05
1月22日	木	3	「フードクリエイティブ論実習B」	3.86
〃	〃	4	〃	

今後の研修で提供する体験授業については、日本語能力をそれほど必要としない活動が望ましいと思われる。敢えて言えば、午前中は知的活動に集中できる環境を、そして午後からは身体的・情感的な活動を中心に、日台の学生が交流できる場を提供できたらと思う。

## VI. ホームステイ

今回の研修全体を振り返って、一番大変だったのはホームステイのための「家庭探し」であった。週末を利用した2泊3日の受け入れ家庭がなかなか見つからず、途方に暮れることが何度もあった。自発的な受け入れを促すために、強引なお願いを控えていたら、まったく集まらないことが分かり始めた。チラシを作成し、500枚ほどコピーを作って、岡山市内と倉敷市内の図書館、公民館、ふれあいセンター等約20カ所へ配布した。しかし、チラシを見て受け入れを申し出る家庭は、結局一つも出現しなかった。焦りながら学内では学生に声を掛け、卒業生にはメールや電話でコンタクトを取った。最終的に、本学に在籍する学生2名、卒業生4名、そして知人1名からなる合計7家族を確保したが、残りは岡山外語学院をお願いして探して頂いた。本学で確保したファミリーには、一家庭を除いて「2泊3日で1人1家庭」というこちらの条件を受け入れて頂いた。実は、この条件こそが「家庭確保」を困難にした原因であったことから、岡山外語学院が行った研修直前の募集では、「1泊2日で

2人も可」と条件を緩和して、急場をしのいだようだ。

本学を出自とする7つのホストファミリーは異口同音に「素晴らしい経験をさせていただいた」とこちらのお礼に対して、お礼で返してくださった。各家庭に対し、受け入れた台湾人学生の様子を尋ねてみたが、こちらも一様に大満足の様子を伝えるメッセージが寄せられた。冒頭に「満足度200%」と記したが、ホームステイがこの満足度に貢献していることは確実である。

今後のホームステイについてであるが、ホストファミリーの募集や斡旋については、岡山外語学院にお任せし、本学としては、「教育的効果」を念頭に入れて、ごく少人数の受け入れを現役学生や卒業生の家庭にお願いすることに留める方が無難であると思う。また、少数に限定したとしても、簡単に見つかるとは限らないため、心当たりのある家庭に対しては事前に「受け入れ」の可能性を打診しておくことが肝要だと思われる。

## VII. 本学学生にとっての研修

今回の研修は、高苑科技大学との今後の更なる交流を推進して行く上で、非常に有益かつ重要なものであったと思う。正直なところ、「ここまで期待していなかった」と言えるほどの成功を収めたものと思っている。ここでは、学内研修での一方の主役を演じた、国際教養学部 of 学生を対象に実施したアンケートの結果を報告する。

国際教養学部学生アンケート結果		
	質問事項	得点
1	今回の研修は自分にとって有意義であった。	4.74
2	今回の研修で行事と学生と積極的に関わることができた。	4.37
3	今回の合同プロジェクトに積極的に参加することができた。	4.16
4	今回の研修を通して台湾に興味を持った。	4.58
5	今後の自分の勉学や生き方に良い影響があった。	4.37

上のアンケートでは、判定に際して1～5のスケールを用いた。どの項目も最高点の「5」に迫る勢い見せ、研修に関わった学生たちの満足度が非常に高かったことを示している。研修全体が有意義なものであったことは、「4.74」という数字に如実に表れている。「普段は触れることがなかった台湾と連日向き合うことが出来た」という新鮮な体験を通して、台湾に興味を持った学生も多い。「日本語を真剣に学ぶ台湾人学生の姿を見て、自分の英語学習に対する気持ちや態度を再認識させられた」とい

う感想からは、学生自らの勉学に対する姿勢や、生き方にすら大きな刺激を与えた研修であったことが伺える。多くの学生が、また同じような機会を持ちたいとコメントを残している。

## IX. 研修スタッフの所感

「本学の学生にとっての意義」に関する所感を以下に記しておきたい。まず、台湾の学生を本学に招いて行われた研修であったため、「異文化交流」が学生の日常で繰り広げられたことの意義は大きい。「舞い上がる」或いは「落ち込む」などという、ホームステイ研修等で異文化（本学の場合は、米国やカナダ）を訪問した際に生じる幾分か「異常」な心理状態とは無縁なところで接触が行われたこと。これは「異文化交流」は、「何も特別なものではない」と体感する絶好の機会であったはずである。使用言語が、普段の自分であることを可能にする日本語であったことの意義も大きい。英語等、他者の言語を用いて、文法の間違いや発音を気にしながらコミュニケーションを図る場合とは、自己肯定感において雲泥の差がある。外国人と対等な（今回は母語である日本語を使用するため、むしろ優位にある）な立ち位置でコミュニケーションを図る経験は貴重である。

台湾人学生の「日本好き」はつとに有名である。研修期間中も彼・彼女たちが、日本に対する憧れの気持ちや、恋慕の情を何度も口にしていたのを目撃している。最終日のさよなら茶話会では、3人の台湾人学生が、感想と感謝を述べるスピーチを行ったが、3人3様に「日本が好きだ!」と大声で叫びながらそれぞれのスピーチを締めくくった。

これまでに、日本と日本人に対する好意や尊敬の念を、このような形で伝えてくれる人たちとの交流が、かつてあったであろうか。少々大袈裟に聞こえるかもしれないが、本学の学生は、台湾人学生と交流できるこのような機会に感謝しなければならないと思う。本学の学生たちは、台湾人という鏡に映る日本の姿を見て、真実の日本を発見することになるのだと思う。また、台湾人学生との交流を通して、国際社会で活躍するために必要な「自己に対する自信」と「自国に対する誇り」を「回復」させることに成功することだと思う。

本研修を通して強く思ったことは、台湾人学生は日本人学生を必要としているが、それと同等に、いやそれ以上に、日本人学生が台湾人学生を必要としているということである。これほどに重大な意義を持つ交流が、今、端緒についたばかりである。

## VIII. 今後の展望

最後に、本研修期間中に、中国学園と高苑科技大学との今後の交流について、引率の先生と協議をする機会を持った。以下にその内容を報告し、両校の交流に関する今後の展望を記しておく。

まず、今回、「冬季研修」として実施した「日本語・日本文化研修」を夏季にも実施し、年二回の恒例行事として実現させて行くことに合意した。夏季の研修は、7月初旬の一週間というのが高苑科技大学の希望であり、現在その方向で可能性を探っている。

両校の交流に相互性を持たせるために、本学からの台湾への学生派遣を高苑科技大学から強く勧められている。時期的には9月初旬が有力である。期間としては一週間から10日程度との提案がなされている。内容としては、中国語の講座に加えて、台湾の文化と社会について学習するプログラムとなりそうである。本学で実施した「日本語・日本文化研修」の中国語・台湾文化バージョンと考えて良いであろう。

また、高苑科技大学からは、セメスター留学という名目で1学期間の長期留学で学生を送り出す考えを持たれている。早ければ、平成29年度前期からの実現を目指したいとのことで、これについても現在その可能性を探っている。

本学から高苑科技大学へのセメスター留学は、当面現実的でないという理由で、協議の対象になっていないため、「授業料援助の相互性をどこに求めるか」について議論をする機会があった。結論としては、非対称的な相互性にならざるを得ないが、本学へのセメスター留学(学生数は2,3名)と本学からの短期台湾研修(学生数は20名ほど)で相殺するという案が有力である。この件については、学内での協議、高苑科技大学との更なる協議が求められる。

最後になりましたが、本研修を大成功に導いてくだ

さった、様々な方々のお力添えに感謝を申し上げる次第です。

## 註

- 1) ホームステイについては、22日の夕刻から2泊3日で参加した学生、23日の午前中から1泊2日で参加した学生がいる。

